

論文の内容の要旨

氏名：山 本 まり子

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究

1. 本研究の目的

『和漢朗詠集』は朗詠にふさわしい中国・日本の詩文、和歌等が載録された平安時代の作品である。撰者とされる藤原公任（966－1041）は学才豊かな当代きっての文化人であった。この公任の撰による『和漢朗詠集』が当時を代表する作品の一つであることに疑いの余地はなく、これを研究することは我が国の文化の基盤を理解する上でも極めて重要である。しかしながらその原本は現存しない。『和漢朗詠集』の姿を窺い知るにはその伝本（以下「写本」ともいう）に頼らざるを得ない。本研究の目的は『和漢朗詠集』の元の姿、及び時代の流れとともに変遷する諸相の一端を探るべく、伝本の実態を明らかにし、系統立てを試みることにある。

2. 平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本の現存状況とその学術的価値

伝本にはいわゆる完本（ほぼ全ての詩歌句が揃っている本）、零本（部分的に欠けている本）、切（断片）があり、それらを合わせると平安時代のものだけでも三十余种に上る。鎌倉時代に至っては、さらに多くの写本が作られている。中には原本が書かれてからわずか数十年後に書写されたと推される写本もあり、いずれも原本を探る上で貴重な資料である。またその中には能書家の手によるものが含まれ、文学のみならず、書（主に筆跡を指す）を研究する上でもその学術的価値は非常に高い。

3. 『和漢朗詠集』諸伝本に関する先学の研究成果と課題

当該諸伝本が活字化されている書籍のうち、代表的なものとして以下の二つを挙げることができる。一つは昭和14年刊行の伊藤壽一・鹿嶋（堀部）正二両氏編『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』である。これは『和漢朗詠集』諸伝本の集成がなされた唯一の書籍である。もう一つは『新編国歌大観』である。今日の研究者が基礎資料として引用するこれら二つの書籍は規範的存在とも言えるが、それぞれ課題を抱えている。

例えば前者は山城切等の解題、釈文のために執筆されたものであることから、山城切を除く伝本の詩歌句の配列については示されていない。しかもそこには誤謬が存する。また後者にも当該作品の翻字内容について訂正されるべき箇所が存する。

今後『和漢朗詠集』の研究を深めていくためには、これらの課題を解決しつつ新たに翻字した資料を作成すべきである。

4. 本研究の内容と方法

諸伝本の特性・特質を見極める上で、書写者・書写年代に関する情報は極めて有用である。伝本からこれらの情報を高い精度で得るために、本文研究のみならず書の研究は不可欠である。しかし従来、書は感覚的に論じられる傾向にあった。時代的特徴が表れる書写内容を重視せずに書風のみで書写者等の推定を行うことは避けるべきである。申請者はこの点に特に留意しつつ、書の研究を本文研究に並行して進めた。

また本研究の一環として多数の伝本の収集、集成を行った。その結果、後述する堀部正二・久曾神昇両氏の所論に扱われなかったいくつかの新たな知見を得ることができた。本研究は従来の知見に新たな知見を加え、平安時代の書写とされる諸伝本に関する先学の研究について形態・本文、及び書の面から改めて検討を行い、諸伝本の実態の解明及びそれらの分類を試みたものである。以下概説する。

堀部氏は主に本文の関係性に着目して平安時代の書写とされる諸伝本を次のごとく分類した。

- (1) 御物伝行成筆粘葉装本の系統に近きもの…… 粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切
- (2) 関戸家蔵伝行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの…… 雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本

(3) いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの
一方、久曾神氏は主に形態的な面から次のごとく大別した。

甲類…… 雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本（雲紙本・関戸本の一類と卷子本・葦手本の一類に分類）
乙類…… 粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

その上で久曾神氏は「少なくとも初稿本・再稿本・精撰本の三種が存するようである。その成立過程は、更に今後研究すべき問題であるが、著者公任の手許に存した原本に、次第に追補せられた結果ではあるまいか」、「この三類の伝本の成立について考えるに、やはり公任の手になったものであろう」とし、甲類の雲紙本・関戸本を「初稿本」、卷子本・葦手本等を「再稿本」、乙類の粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切を「精撰本」と位置付けた。

確かに堀部氏(1)・久曾神氏乙類の四本の関係は近い。また堀部氏(2)・久曾神氏甲類のうち、雲紙本と関戸本との関係、及び卷子本と葦手本との関係も近い。しかしながら「初稿本」、「再稿本」、「精撰本」という伝本の成立過程の捉え方については首肯し難い。

申請者はまず、11世紀中葉の書写とされる雲紙本と関戸本との関係について検討を行った。両本の書写者が源兼行（生没年未詳）であることは定説である。しかし両本の書写時期について、どの程度の間隔があるのか、その間については先学では見解が異なり、またその決定的とも言える根拠が見当たらない。申請者は書き振りに加え、用字についても考察を行った。その結果、①雲紙本の方が関戸本よりも前に書写された、②両本の書写年時の間隔はさほど離れていない、と推定した。また形態・本文・注記についても近い関係にあることを確認し、なおかつ両本間に見られる相違、その異同の誘因、及び両本の親本の姿に関する私見を述べた。

堀部・久曾神両氏は、両本間に見られる詩歌句数の相違（関戸本に無い五首、雲紙本に無い三十八首）について、「誤脱」、「脱漏」に因ると指摘した。この説に対して申請者は、これらは意図的に変えられたものであり、しかもその選定には書写者（源兼行）ではなく、当該作品の撰者である公任または公任に近い人物が関わった可能性があるかと推定した。

次いで粘葉本と伊予切との関係について検討を行った。形態・本文、書の面において両本は極めて近い関係にある。書家であり書の研究者でもあった安東聖空氏は「同一人物が同一の和漢朗詠集を数多く書いた」と述べた。申請者は書そのものに加え、書写された内容についても比較検討を行った。その結果、両本の近似性は認めたものの、同筆と仮定すると矛盾する点も見出し、したがって両本は別人の手によると提言した。

ところで粘葉本と伊予切には、他の諸伝本中にはない両本にのみ見られる特異な本文が存する。申請者の提言（両本が別人の手による）が真であるならば、その特異な本文は書写者達の誤写の偶然の一致によるものではなく、両本の親本に起因する蓋然性が高いという点を付言した。

以上の考察結果を踏まえ、形態的な面を中心に雲紙本・関戸本と、粘葉本・伊予切との関係について再検討を行った。その結果「雲紙本・関戸本に〈追補〉されたものが粘葉本・伊予切であり、〈初稿本〉から〈精撰本〉へと一元的成長を遂げた」という久曾神氏の所説を否定せざるを得ないと結論づけた。

また「再稿本」という捉え方についても整合しない点が明らかとなった。久曾神氏は卷子本・葦手本を雲紙本・関戸本と同じく甲類としたが、その位置付けは不明瞭である。堀部・久曾神両氏の分類の通り、形態面において卷子本・葦手本が雲紙本・関戸本の流れを汲むものであることに異論はない。しかし本研究において、両本の本文には、堀部氏(1)・久曾神氏乙類の四本（粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切）と、堀部氏(2)・久曾神氏甲類のうち二本（雲紙本・関戸本）との混在が確認された。またこのような雲紙本・粘葉本等の本文混在の様相は、卷子本・葦手本だけではなく、両本と同じく12世紀の書写と推定されている諸伝本についても指摘し得る特徴である。加えて12世紀書写本に特有かと思しき形態、本文等も確認された。したがって諸伝本の系統立てを試みる際、卷子本・葦手本を雲紙本・関戸本の類から切り放し、さらに12世紀の書写とされている諸伝本と同じカテゴリー内に収めるべきであると考えた。

既に書の研究者により、書風上の類似性の観点から諸伝本の分類はなされていたが、それは一部の伝本にとどまる。本研究により、内容面において新たにいくつかの伝本の関係性が明らかになり、それらは同じグループに属することが判明した。例えば12世紀書写本の主たるものには、卷子本・葦手本の他、伝公任筆唐紙切・安宅切・定信筆大字切・戊辰切が挙げられる。それらは代々能書を輩出し

た世尊寺家、あるいはその周辺の人々による書写かと思しき伝本であり、同一グループとするのが妥当であると判断した。

5. 本研究の今後の課題

書の研究者による所説の中には、前述した12世紀書写本のうちの伝公任筆唐紙切を藤原伊房（1030－1096）の真筆とし、戊辰切（巻下）を藤原定信（1088－1154以後）の真筆とするものがある。伊房と定信はともに日本の書の歴史に多大な影響を与えた人物であり、これらの伝本は学術的価値が高いと言える。ところが本研究を進める中で、書写内容・表記の面において当該説に整合しない点が見出された。今後、本考察結果を踏まえ、特に書に焦点を当てて従来の説について検討を行う予定である。

また、より多くの資料を収集、集成し、それぞれの伝本の実態を明らかにする試みは古典の基礎研究に必須であるところ、『和漢朗詠集』については金字塔的作品でありながら研究の基盤を成す本文の整備が未だ十分に行われておらず、それは喫緊の課題と言ってよい。

さらに先に述べた通り、先学の研究成果には誤謬・謬説かと思われる箇所、不明瞭な説明が存する。まずはそれらを見直す必要がある。その上で、各伝本に関するより多くの情報を開示していきたい。これにはインターネットを活用する予定であり、現在、そのシステム構築に取り組んでいる。その際、単なる情報の羅列にならないことが肝要である。本研究成果が大きく寄与するものと確信している。